

「ありがとう西高！」新聞

発行元：「ありがとう西高！」実行委員会広報室
Mail : nishikouarigatou@gmail.com

Instagram : nishikouarigatou
twitter : @nishiko_arigato
Hashtag : #ありがとう西高

西高の歴史を保存する

5月の初め、「ありがとう西高！」実行委員会はその活動の一環として、学校に許可をいただき図書室の書庫で歴史的資料の調査を行った。ここに学校の古い資料が眠っているという噂は以前にも聞いたことがあったが、記者が入ったのは初めてのことだ。

歴史的資料を司書室から「発掘」

北校舎4階の図書館の奥、司書室からさらに扉を開けて進んだ書庫に、大きな辞典や新聞の縮刷版が並んだ棚に混じって、そのコーナーはあった。紐で綴られている一際古そうな紙束や、巻かれたポスターが入った段ボール箱。クラフト紙の包みなどが詰められている一列の棚。薄暗い書庫の奥まったその一角は、おそらく校舎建設以来使われている上下のガラス窓や引き戸の隙間から微かに漏れる青白い光に照らされた場所。休日のため生徒の声も聞こえず、まるで森の奥の聖域といったような空気を湛えていた。

まず目についたのは厚紙でできた手作りの背表紙に大きく書かれた「学校要覧 昭和三十七年～平成六年」の文字だ。学校要覧とは、各種統計データなど学校に関する情報の塊であり、昭和37年といえば西高が発足した年、校舎がまだ日進の自衛隊駐屯地にあった頃だ。開いてみると茶色く変色した紙に、見慣れた校章と共に「埼玉県大宮市立高等学校」と西高の当時の名称が書かれていた。驚くことに内部もすべてガリ版印刷のような古典的な手法で製造されたもので、明らかに手書きで作られている。人間味あふれる文字を読んでいると、新しい学校を開くにあたって無数の困難に立ち向かった人々の労苦が滲み出ているようで、自分もそこから始まった歴史の一部である事を思い出すと心が震えた。

棚にはほかに、文化祭など行事の記録や新聞部発行の電光石火、「ねんりん」のバックナンバーに加え、西高発足時の職員で校章の原案者とされる杉山正雄氏と思われる人物が



歴代の司書による整理の跡が

寄稿した日進校舎に関する記事が載る五周年記念誌や、各施設の落成記念誌が。幾度も増改築を重ねてきた校舎に関する記録の数々も発見された。中には校舎や旧体育館の建造時の様子を写した写真やフィルムもあり、近年すっかり見なくなったモノクロフィルムに焼付いた画像は、これまで本紙でも書かれてきた西高の歴史を裏付けるものだった。

種々の資料は網羅的かつ相当整理された状態で保管されており、これも歴代の司書や図書委員など、図書室に関わってきた者たちが西高の歴史を大事に扱ってきた賜物だろうと思われた。まさにアーキビストたちの魂の痕跡であると同時に、西高への愛の結晶であろう。これらの資料の一部は、新校に設置されるアーカイブコーナーに引き継がれる予定となっているが、まだ詳細は決まっていない。一見しても重要な史料が多く、慎重な取り扱いをしていくべきと感じられた。

2日間かけて行った今回の調査では、その全体像を把握するにとどまったが、今後も継続して調査そして整理と保全活動を行ってきたいと考えている。(石川)



記者在学時(2011年5月)の昇降口の姿

あの場所は、今 -昇降口編-

記者が昨年、数年ぶりに母校に赴いたとき、新しく生まれ変わろうとしている西高の様子を目の当たりにした。在校時、駐車場だった場所では新しい校舎の建築が行われていた。新校舎の建造に伴い、南校舎二階にあった昇降口は使用されなくなっていた。昇降口へと続く外階段もなくなり、昇降口は単なるフリースペースとして扱われていた。

記者の入学時、昇降口の下駄箱は、1年次は二階を使用していた。当時あった階段は、その年に起きた東日本大震災の影響で地面のアスファルトが大きく盛り上がり、改修工事が行われた直後だった。先輩から、この工事を経て「階段が一段増えた」と聞いて驚いたことを覚えている。昇降口の扉は放課後、防犯対策として自動施錠され、校舎の内側からしか開けられなかった。忘れ物を取りに戻ってきた際は校舎内から開けてもらわなければならない、記者は部活で校舎内によくいたため、いつもその役目を担わされた。

昇降口は、単に出入り口としてだけでなく様々な使われ方をしていた。例えば箏曲部の文化祭発表は二階昇降口で毎年行われていた。箏曲の美しい音色に往来する人々が足を止めて聞き入っていた。一階の昇降口前では昼休みの弁当の予約受付があり、記者もよく利用していた。

当時の面影こそないものの、かつての昇降口は新校舎との「架け橋」となっているはずだ。これから橋渡しとしての役割をあの場所が果たしてくれることを願いたい。(石井)

大宮西高伝

退学危機を乗り越えた、先生との絆

長谷川 楽久人さん（イベントディレクター）

彼はいつも忙しそうだ。都内のイベント会場、リハーサル進行を一通り仕切ると、タクシーで別の現場へ。複数イベントを同時進行で担当することも珍しくない。

小規模な記者発表会から、数十万人を動員するモーターショーまで。彼が裏で支えているイベントは数多い。業界大手のイベント制作会社でテクニカルディレクターを務める長谷川楽久人（たくと）さんに高校時代の話聞いた。



忙しいなか、仕事の合間に取材を受けてくれた長谷川さん。

不運な事故、そして退学の危機

いたって真面目な風貌の長谷川さんだが、高校時代は「不真面目な生徒だった」と語る。1、2年生の頃の思い出は曖昧なものしか残っていない。適当にバイトして、適当に遊んで、授業も適度にサボって。の繰り返し。

そんな高校生活を見直す転機になったのは3年生の春のことだった。「振り返ってみたら、高校生らしいことを全然やっていなかった」と立ち止まる。3年目は逆に、思いっきり高校生らしいことに振り切ってやろうと、一念発起。文化祭の実行委員に立候補した。

「入ってみたら結構面白くて、先輩後輩というタテの繋がりができたのがありがたかった。部活に入っていなかったから、後輩との接点はこれだけ。でも、いまでも飲みに行ける仲です」と振り返る。そんな、高校生らし

い生活を満喫しはじめた長谷川さんに、突然の悲劇が襲った。

大型トラックとの交通事故。意識不明になるほどの大怪我を負った。複数の骨折に加え、左腕の神経が切断され、一時的に動かなくなった。何度かの手術と辛いリハビリを経て、退院できることになった長谷川さんだったが、また悲劇が襲う。それは、出席日数の不足とテスト欠席による留年の危機だった。

尽力してくれた恩師への感謝

「成績自体はそんなに悪くなかったんだけど」と前置きしながら、「1、2年生の頃から、欠席が多かったこともあって出席日数は元々卒業ギリギリだった」その上での長期入院。卒業は絶望的だった。長谷川さん本人も「留年は覚悟したし、退学も覚悟しつつあった」と振り返る。

そんな彼を救ってくれたのは、担任の田中建先生だった。卒業を諦めかけていた長谷川さんを励まし、出席が足りなかった各教科の

先生方に、卒業に向けた補習を個別交渉。卒業に向けた課題を集め、卒業までの道筋をつけてくれた。文字通り「山のような」課題ではあったが、何とか提出し、長谷川さんは無事に卒業することができた。「田中先生がいなかったら、たぶん卒業できなかった。先生には一生頭があがらないです」とつぶやく。

その後、1年間の浪人を経て、都内の大学に進学した長谷川さん。さらに神経移植手術を経て、左腕の神経も接合され、今では事故前とほぼ変わらない活動ができるようになっている。

最後に皆で集まれる場を

悲劇を乗り越え、忙しく活躍する日々を送る長谷川さんに、西高が無くなることについて聞いた。「もう決まったこと。仕方ないこと」落ち着いた口調で続けた。「けど、せっかくだから皆で集まりたいですね」。

閉校式などのイベントが開催されるなら、裏方には長谷川さんの姿があるに違いない。